近現代の漢語副用語における「ニ型／φ型」のゆれ及び変化と修飾機能との関係

趙 英 姫*

目　次

1. 本稿の目的
2. 資料の集計
3. 近現代の漢語副用語の語基の変化と形態のゆれ及び変化
　3.1 語基の変化
　3.2 漢語副用語の形態のゆれ及び変化
4.「φ型／ニ型」の形態のゆれ及び変化と修飾機能との関係
　4.1 陳述の漢語副用語はφ型を、様態の漢語副用語はニ型をとりやすい
　4.2 程度の漢語副用語はφ型を、様態の漢語副用語はニ型をとりやすい
　4.3 属性の副用語と状況の副用語の境界線上にあるものはφ型をとりやすい
5．まとめ

1．本稿の目的

漢語は中国語が日本語に流入したもので本来外来語であるが、その流入の歴史が長く、近代以降日本語に流入した西洋の外来語とは違って、日本語の一部分として溶け込んでいる。漢語の多くは他の多くの外来語と同様体言相当に扱われるが、なかには和語の助辞を伴い、述語または副用語として振舞うものも多い。ほとんどの和語は文の構成要素の語として振舞い方が決まっているが、漢語は構成要素の語としての振

* 高麗大學　非常勤講師　日本語學

www.kci.go.kr

舞い方がいろんな品詞にわたるものが多く、漢語の品詞分類は漢語研究における大きな課題である。

本稿ではそうした特徴を持つ漢語のなかでも用言や用言相当の語句を修飾する文法機能を持つ漢語副用語を考察対象としている。漢語副用語とは、語基の部分に一単位以上の字音形態素を含み、単独または和語の助辞[1)]が結合した形で文のなかで主に用言や用言相当の語句を修飾するもの、または場合によっては述部全体を修飾するものを指す。また、一般には形容動詞の連用形とされるものや時間と数量の名詞で副用語的に使われるものも考察の対象に入れた。狭義の借用語に限らず、いわゆる和製漢語も含まれる。一般的な用語として副詞という品詞分類上の用語があるが、本稿の分析対象には狭い意味の副詞より広い範囲の、副詞的に使われ、述部を修飾する諸成分が含まれるので、漢語副用語という用語を使っている。

漢語語基はガ・ヲ、ナ・ノ、スル[2)]などの助辞を伴い、文の成分として働く。ところが、従来の品詞分類で形容動詞に分類される類の連用用法も入れて、副詞的に使われ、述部を修飾する諸成分を副用語として考えたとき、漢語副用語はニ、ト、トシテなどの多様な和語助辞を伴ったり、また場合によっては助辞を伴わないなどいろいろなものがあり、ほかの品詞性のものより複雑である。筆者はその点に注目し、拙稿趙英姫（2003）で漢語副用語を修飾機能によって三つに分類し、漢語副用語の形態と修飾機能との関係について指摘した。本稿の目的は、近現代における漢語副用語の変遷を概観した上で、「ニ型／φ型」のゆれ及び変化と漢語副用語の修飾機能との関係について考察することである。

ここで使っている「形態」という用語は、語の構成単位である形態素、つまり語基または語基と接辞の結合形が文中の構成要素である語となるときの姿、つまりどんな助辞を伴うか、を意味する。例えば、「自然」という漢語語基は文中副用語となるとき、「自然に」「自然と」「自然」の形態で使われる。本稿での形態の分類でφ（ゼロ）型は助辞を伴わないもの、ニ型、ト型、トシテ型はそれぞれ和語の助辞「に」「と」「として」を伴って文中で副用語として機能するものを意味する。

趙英姫（2003）では、漢語副用語を修飾機能によって、属性の副用語と状況の副用語、陳述の副用語に分類した。この分類の考え方は国立国語研究所『話しことばの文型(2)』(1963) にすでに示されている。同書では、文節相当のものを基本単位として、文の成分を「述語」「主語」「連用修飾語—(a)目的語(b)補語(c)連用語(d)状況語」「陳述的成分」「独立語」「句の扱い」に分けている。

1) 助辞とは、語基と結合して語基を文の成分として機能させる形態素のことである。
2) ここでの「スル」は漢語語基と結合し、文の成分として機能させる形態素レベルのものなので、助辞である。

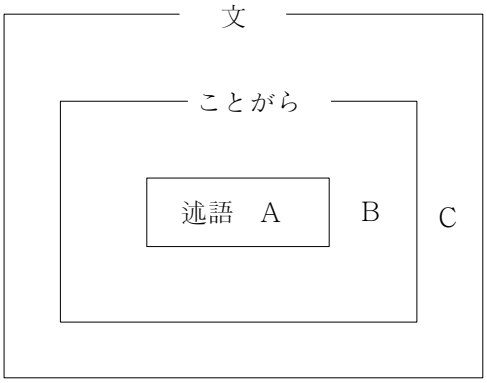
www.kci.go.kr

「連用修飾語」のうちの(c)連用語(d)状況語と「陳述的成分」の概念が三つの分類の概念に該当するものである。同書では以下のように定義している。

> 連用語(R)は、述語（あるいは述語にかかる主語・目的語・補語とのくみあわせ）の表わすことがらの性質・ようす・程度など、属性を一層くわしく示す成分である。（国立国語研究所(1963) p.75)
> 状況語(J)は、述語（あるいは述語にかかる主語・目的語・補語・連用語とのくみあわせ）の表すことがらをとりまく外的な状況（時間・空間・原因・理由・条件……）を示す成分である。（同上 p.75)
> (4)陳述的成分（略号T）
> この成分は何らかの点で、もっぱらその文の陳述的な面に関係するものである。（同上p.80)

この分類では、対象は副用語だけに限らず、連用語のなかには「ナランデ歩ク」の「ナランデ」のようなものや従属句も含まれているが、分類の基本概念は漢語副用語の分類にも十分適用できるものと考えられる。漢語副用語で上記の引用した部分の、連用語のような機能をするものを属性の副用語、状況語のような機能をするものを状況の副用語、陳述的成分と同じ機能をするものを陳述の副用語として分類した。以下は趙英姫（2003）で考察した漢語副用語の形態と修飾機能との関係について図にまとめたものである。

図１　漢語副用語の形態と修飾機能との関係（ダ・ナ類の連用用法も含む）



A：「属性の副用語」
ダ・ナ類の連用用法、ト型・トシテ型、ニ型の一部、φ型の一部
B：「状況の副用語」
φ型
C：「陳述の副用語」
φ型、ニ型の一部

www.kci.go.kr

(ダ・ナ類とは、助辞ダとナを伴い述格と連体格[3]に立つもの、従来の品詞論の分類で形容動詞に分類されるものを意味する)

(趙英姫（2003）、p.59)

2．資料の集計

明治の言文一致期以降明治末までを近代語形成期とし、当時の小説作品から漢語副用語を抽出した。1960年代から1980年代までの小説作品から現代語の漢語副用語を抽出し、両者を比較する（以下、便宜上両データを明治期データ、昭和期データと呼ぶことにする）。なお、本稿ではすでに研究の目的でふれたとおり、形容動詞のほか、従来名詞[4]として分類されがちであった数量、場所を表すものなども含め、用言[5]や用言相当の語句または述語を修飾する働きをするものはすべて副用語として考察対象としている。調査対象の作品は稿末に示した。

明治期データの採集用例数

延べ語數	異なり語數	語基數
4029	566	506

昭和期データの採集用例数

延べ語數	異なり語數	語基數
4077	547	508

語基数とは、複数の助辞がつく語基を一つに数えたときの数である。例えば、「案外」「案外に」「案外と」は異なり語数では3であるが、語基数では「案外」1として数える。

採集用例数の集計からは明治期と昭和期で顕著な違いはないようにみえる。

表１　明治期データと昭和期データの異なり語数の比較

	明治期データ	昭和期データ

3) 山田孝雄はすべての実質語に格を認め、呼格、述格、主格、賓格、補格、連体格、修飾格の7格に分類している。用言の主たる用は陳述の用をなすもことと、体言の装定をなすこととし、その陳述の用をなすものを述格に立てるものとし、体言の装定をなすものを連体格に立てるもの、としている。（山田孝雄（1909）『日本文法論』宝文館出版p.860-882)

4) 数量、時間を表す名詞には単独で副用語的に用いられる用法があることから、これらは時と数の名詞として分類されることもある。

5) 用言を修飾するもののなかには、「きれいに咲いた花」の「きれいに」のように文を完結させる機能がなく、連体修飾句のなかで修飾するものも含まれる。

www.kci.go.kr

明治期データにしか出現しないもの	312(55.1)	－
明治期データと昭和期データ両方に出現するもの	254(44.9)	254(46.4)
昭和期データにしか出現しないもの	－	293(53.6)
計	566(100.0)	547(100.0)

(括弧のなかの数字は百分比である。以下、同様。)

表２　明治期データと昭和期データの延べ語数の比較

	明治期データ	昭和期データ
明治期データにしか出現しないもの	657(16.3)	－
明治期データと昭和期データ両方に出現するもの	3372(83.7)	3118(76.5)
昭和期データにしか出現しないもの	－	959(23.5)
計	4029(100.0)	4077(100.0)

全体的な傾向として明治期と昭和期データでは延べ語数と異なり語数ともに大きな変動はみられない。延べ語数では約七割から八割ぐらいのものが共通しており、異なり語数では約四割ぐらいのものが共通している。

３．近現代の漢語副用語の語基の変化と形態のゆれ及び変化

3.1語基の変化

両時期における「ニ型／φ型」の形態のゆれと変化にふれる前に、まず両時期の漢語副用語の語基の変化についてふれておく。明治期データの漢語副用語の語基数は506、昭和期データの漢語副用語の語基数は508でほぼ変わらない。明治期と昭和期両時期に共通して出現する語基数は243で、明治期データにしか出現しない語基数は263、昭和期データにしか出現しない語基数は265である。明治データに出現する全語基のうち約半分ぐらいのものが昭和期には新しく出現する語基に入れ替わったことになる。また、語基の種類には当然変化があるにしても、今回の調査に限っていえば、文中で漢語副用語となる漢語語基の数は明治の言文一致期以降1960－80年代までの間、一定量が保たれているということになる。

www.kci.go.kr

明治期データにしか出現しない語基の例を以下に示す。

安閑　因果　欝々　果然　喟然　結句　極々　悉皆
粛々　熟練　書生流　絶体絶命　泰然　篤　婆娑
不平　勃然　無上　轆々

助辞ト、またはトシテがつくものが多い。

明治期データと昭和期データ両方に出現する語基の例として以下の例をあげる。現代語として使用頻度の高いものが多く含まれている。

意外　一番　一体　簡単　急　最初　実際　実
十分　是非　大変　沢山　多分　突然　比較的[6)]
非常　別　本当　勿論

ここに属する語基のうちには明治期データでは「正直に」として使われていたものが昭和期では「正直に」のほかφ型の「正直」の用例もみられ、形態に変化がみられるものがあるが、形態に変化が起きているものについては次節で述べることにする。

次に、昭和期データにしか出現しない語基の265例には次のような語基がある。

曖昧　一方的　完全　極端　経済的　戸籍上　事実
積極的　相当　当然　内容的　発売後　不機嫌　普通
文化的　明晰　優先的

明治期になくて昭和期に新たに出現した語基には接辞的字音形態素「的」「上」「後」を含む三単位の語基が多くみられるのが特徴である。

[1]すると忽ち、停年退職した先輩たちの噂話が、わっと持上った。退職金を持参金にして子会社の重役になりすました者。退職金でアパートを建てた者。子供が多いので、高給だけを目的に夜警になったという話もある。が、そういう中で経済的に安定している者が、どうも呆けてきているらしいという結論になってきた。(『恍惚の人』1972)

[2]大正15年1月19日、江分利は大森の入新井で生まれた。だから、厳密にいえば東京生まれではない。それはいいが、1月19日に生まれたのに、戸籍上は11月3日生まれとなっている。 (『江分利満氏の優雅な生活』1963)

特に、明治期の語基に比べて接辞的字音形態素「的」を含んだ語基の増加が指摘できる。明治期データの「的」を含む語基数は15例であるが、昭和期データでは58例に増加する。このうち「機械的」「神経的」「精神的」「比較的」「本能的」「論理的」の6例は両時期において共通するものである。

6) 「比較的」のように二単位の語基と接辞的字音形態素が結合したものは、派生語基となる。

www.kci.go.kr

3.2漢語副用語の形態のゆれ及び変化

前節で述べたように、漢語副用語にはその形態にゆれ及び変化がみられるものがある。これらのほとんどは、明治期と昭和期両方に出現するものであり、今回調査した漢語副用語のデータでは明治期以降、比較的安定的に使われていたと考えられるものである。明治期データにしか出現しないもので形態にゆれがみられるものは「 一心(1)／一心に(17)」の１例だけ、昭和期データにしか出現しないもので形態にゆれがみられるのは、「 一瞬(37)／一瞬に(1)」「 絶対(8)／絶対に(18)」があった（括弧のなかの数字は延べ語数を表す）。以下に、形態にゆれと変化がみられるものの全例を表３と表４で形態別にまとめて示す。表３の形態のゆれの用例は、明治期と昭和期両時期において同一の語基の、二つ以上の複数の形態が存在し、形態にゆれがみられるものである。そして、表４は、明治期に存在した形態が昭和期には消滅したり、または明治期になかった形態が昭和期に出現したりするものを形態の変化とみてまとめたものである。表４の形態の変化の用例には変化とともに、形態のゆれもみられるものが多いが、ゆれと変化は区分して表３と表４で示した。

表３　明治期データと昭和期データに共通して出現する語基の形態のゆれ

形態別分類	明治期データ	昭和期データ
「ニ型／φ型」のゆれ	一時(5)　／一時に(15) 一向(57) ／一向に(6) 一生懸命(8)／一生懸命に(20) 一杯(10)／一杯に(7) 散々(9) ／散々に(2) 實際(24)／實際に(2)[7] 十分(28)／十分に(19) 突然(38)／突然に(2) 本当(1)／本当に(112) 余計(2)／余計に(4)	一時(10)／一時に(1) 一向(1) ／一向に (28) 一生懸命(14)／一生懸命に(2) 一杯(13)／一杯に (19) 散々(11)／散々に (2) 實際(41)／實際に (19)[8] 十分(12)／十分に (9) 突然(79)／突然に(3) 本当(1)／本当に (200) 余計(2)／余計に (5)
「ト型／φ型」のゆれ	一段(10)／一段と(5) 隨分(86)／隨分と(1) 段々(50)／段々と(2)／段々に(12)	一段(1) ／一段と(3) 隨分(82)／隨分と(3) 段々(24)／段々と(1)／段々に(1)

www.kci.go.kr

「ト型／トシテ型」のゆれ	茫然と(2)／茫然として(4)	茫然と(4)／茫然として(5)

表 4　明治期データと昭和期データにに共通して出現する語基の形態の変化

形態別分類	明治期データ	昭和期データ
「ニ型／φ型」の変化	案外(4)	案外(16)／案外と(1)／案外に(1)
	一番(66)／一番に(1)	一番(87)
	一体(47)／一体に(5)	一体(108)
	格別(5)	格別(2)／格別に(1)
	偶然(2)／偶然に(2)	偶然(7)
	早速(36)／早速に(1)	早速(13)
	直(9)／直に(17)	直(7)
	自然(12)／自然に(7)／自然と(16)	自然(2) ／自然に(17)
	正直に(5)	正直(6)／正直に(9)
	精一杯(1)／精一杯に(1)	精一杯(2)
	是非(59)／是非に(1)／是非とも(7)	是非(9)
	存分(3)／存分に(1)	存分に(1)
	大層(63)／大層に(4)	大層(5)
	大変(82)／大変に(4)／大変と(1)	大変(9)／大変に(4)
	澤山(32)／澤山に(1)	澤山(25)
	直接に(1)	直接(18)／直接に(2)
	特別に(1)	特別(3)／特別に(2)
	内々(3)／内々に(1)	内々に(1)
	無事に(8)	無事(1)／無事に(2)
	普段(8)	普段(19)／普段に(1)
	別段(32)／別段に(2)	別段(16)

7) 係り助詞ハがついた「実際は (6) 」を入れると、「実際 (30) 」となる。
8) 係り助詞ハがついた「実際は(6)」「実際には(9)」を入れると、「実際 (47) 」「実際に (28) 」となる。

www.kci.go.kr

	銘銘(1) 猛烈に(1)	銘銘に(1) 猛烈(2)／猛烈に(2)
「ト型／トシテ型」の変化	依然(1)／依然として(5) 愕然として(7) 決然(1)／決然として(1) 恍惚と(2)／恍惚として(1) 悄然と(3) 續々(2)／續々と(4) 端然と(1) 斷然(6)／斷然と(1) 点々として(1) 憤然と(2)／憤然として(3) 默然として(3)	依然として(4) 愕然と(2) 決然と(1) 恍惚として(1) 悄然として(1) 續々と(1) 端然と(2)／端然として(1) 斷然(2) 点々と(2) 憤然として(2) 默然と(1)／默然として(1)
「ニ型／ト型」の変化	意外に(12) 無理に(27)／無理と(1)	意外に(9)／意外と(10) 無理に(13)

表３の「ト／φ型」のゆれの例「段々(50)／段々と(2)／段々に(12)（明治期）」、「段々(24)／段々と(1)／段々に(1)（昭和期）」の例は、「φ／ト／ニ型」のゆれとして分類すべきであるが、ほかにこのタイプに属する例がないので、「ト／φ型」のゆれの分類に入れた。表４でも「自然(12)／自然に(7)／自然と(16)　（明治期）」「 自然(2) ／自然に(17)（昭和期）」、「 是非(59)／是非に(1)／是非とも(7)　（明治期）」「 是非(9)（昭和期）」、「 大変(82)／大変に(4)／大変と(1)（明治期）」「 大変(9)／大変に(4)（昭和期）」は、複数の形態がかかわっているが、「ニ／φ型」として代表させた。

表４は、明治期データと昭和期データを比較したとき形態に変化がみられるものをまとめたものである。例の多くは、一対一の変化ではなく、形態のゆれと変化が複合的に起きているものである。例えば、明治期データの「意外に(12)」は昭和期データでは「意外に(9)／意外と(10)」となるので、「ニ／ト型」の変化の例であると同時に昭和期データでは「ニ／ト型」のゆれの例でもある。表４の用例で「愕然として(7)→愕然と(2)」「 悄然と(3)→ 悄然として(1)」「 点々として(1)→ 点々と(2)」の一対

www.kci.go.kr

一の変化を示す例以外のものは、すべて形態の変化とゆれが複合的に起きているものである。

表 3 で形態のゆれがもっとも多くみられるのは「ニ／φ型」のゆれで、次に「ト／φ型」「ト／トシテ型」が多い。表 4 の形態の変化でもっとも多いのは「ニ／φ型」の変化であり、次に「ト／トシテ型」の形態の変化の例が多かった。本稿では、表 3 及び表 4 において形態のゆれ及び変化の例がもっとも多く見られる「ニ型／φ型」について考察を行うことにする。

明治期データにしか出現しない漢語副用語で形態のゆれがみられるものは「一心(1)／一心に(17)」の1例、昭和期データにしか出現しない漢語副用語は「一瞬(37)／一瞬に(1)」「絶対(8)／絶対に(18)」の2例しかなく、ほかにゆれ及び変化がみられる例はすべて明治期と昭和期に共通して出現するものである。これは、明治期から昭和期まで副用語として比較的安定して出現していた漢語副用語において形態のゆれ及び変化がよくみられることを意味する。この結果からいえるのは、漢語語基は副用語として機能するときに和語の助辞を必要とするが、その助辞と漢語語基との結合は和語の副用語とは違ってゆるやかだということである。漢語は、最初から副用語として日本語に流入されるものもあるが、主として体言として日本語に入り[9]、助辞を伴って副用語として機能する。その体言性の漢語語基と和語の助辞との結合がゆるやかだということが表4からも確認されるのである。

和語の副用語は、漢語の副用語ほど同じ時期に複数の形態が出現したり、形態が変化したりすることは考えにくい。語基と助辞との結合はもっと緊密である。漢語サ変動詞の場合、語基と助辞スルとの間には切れ目が感じられやすく、そこに助辞ヲが入った形態と入らない形態が両方存在するものがあることが指摘されるが、それと同様に、漢語副用語の場合も語基と助辞との間に切れ目のようなのが感じられると考えられる。そのためか、漢語副用語には比較的自由に複数の形態が存在するものがある。用例のうち、「無事に」と「無事」は助辞ニがついた形態とニがつかないφ型の形態両方が出現し、意味はまったく同じである。現代語でも「無事に」と「無事」は両方の形態とも違和感を感じない。

[3]「藤原さんとこも大変ね。この行夫さんて人、無事生きてくれるといいけど、それでも心中の片割れということになると、一生、そういう意識がつきまとうでしょうしね」（『太郎物語』1973）

[4]「無事に見つかるといいんですけどね。お爺ちゃんが一人きりで飛出

9) 漢語の流入を歴史的にみたとき、漢語は主として体言として日本語に入ってくる。そして、その品詞性は時代によって変化するものもある。したがって、表 3 と表 4 の用例が今現在、体言として使われうると主張するものではない。

www.kci.go.kr

したのはこれが初めてだから」「なに年寄りの足だ、そう遠くまで行けないさ」（『恍惚の人』1972）

また、漢語副用語には、一種の変形ともいえるような、非常に臨時的にある助辞と結合する例がみられる。以下に、その例を示す。一般的でない形態をとることで強調の表現効果をねらったものとも考えられるものである。このような変形が臨時的に出現したりするのも漢語副用語の語基と和語の助辞との結合がゆるやかだからであろう。

[5]暫くは黙つてゐたけれど、いつまで話もしないでゐるは猶をかしい様に思つて、無理と話を考へ出す。（『野菊の墓』1906）

[6]此時ほど危ないめにあつたことはマアないんですと、其手に庖丁を振まわされた時は、大変とビツクラしたもんだから、かみの毛がチヨツキリおつ立つちまつて、どふしてもねませんかつたと、そうして其主が今其まんまでヂェレの皮を被つてゐて、丸でブラシの様ですと。（『小公子』1980-91）

4．「φ型／ニ型」の形態のゆれ及び変化と修飾機能との関係

4.1　陳述の漢語副用語はφ型を、様態の漢語副用語はニ型をとりやすい

傾向として近現代の漢語副用語の「φ型／ニ型」の形態のゆれ及び変化は、漢語副用語の修飾機能と関係がある。同じ漢語語基からなる漢語副用語でも、陳述の漢語副用語はφ型を、属性の漢語副用語のうち、用言の属性を詳しく修飾する様態の漢語副用語はニ型をとる傾向がみられる。

・「実際に」と「実際」

明治期データの「実際に」は以下の2例があって、2例とも「うそではなく事実として」の意味の属性の副用語である。ただし、この２例とも『刺青』の用例なので、明治期において属性の副用語「実際に」の用法は一般的ではなかった可能性もある。

[7]私は自分で自分の手の美しさに惚れ惚れとした。此のやうな美しい手を、実際に持つてゐる女と云ふ者が、羨ましく感じられた。（『刺青・秘密』1911[10]）

10）（『刺青・秘密』1911）は単行本『刺青』に所収された短編『秘密』が用例の出所であることを意味す

www.kci.go.kr

[8]此の問答をきいて、私は愈愈驚いたが、可愛らしい女のやうな信一が、荒くれた熊のやうな仙吉をふん縛つて苦しめて居る光景を、どう考へて見ても実際に想像することが出来なかった。（『刺青・少年』1911）

一方の「実際」は24例があるが、「うそではなく事実として」の意味で用言を修飾する様態の副用語のと陳述の副用語の両方の用法がみられる。このうち陳述の副用語の例は4例で、ほかは「うそではなく事実として」の意味を表し、用言を修飾する属性の副用語の例である。以下、「実際」の陳述の副用語の例を示すが、陳述の副用語の例の出典は『刺青』が 2 例、『吾輩は猫である上編』が1例、『坊つちやん』が1例である。つまり、明治期には「実際に」よりは「実際」のφ型が優勢で、「実際」は陳述の副用語より属性の副用語としての用法が優勢であったようにみられる。

[9]「然し君注意しないと、険呑ですよ」と赤シヤツが云ふから「どうせ険呑です。かうなりや険呑は覚悟です」と云つてやった。実際おれ職になるか、寄宿生を悉くあやまらせるか、どちか一つにする了見で居た。（『坊つちやん』1906）

[10]女は果たして私に気が付いて居るのであらうか。どうも判然と確かめることが出来なかつた。明りがつくと連れの男にひそひそ戯れて居る様子は、傍に居る私を普通の女と蔑んで、別段心にかけて居ないやうでもあつた。実際其の女の隣にいると、私は今迄得意であった自分の扮装を卑しまないわけには行かなかった。（『刺青・秘密』1911）

ところが、昭和期データでは「実際に」が19例、「実際」が41例あるが、ニ型の「実際に」は「うそではなく事実として」の意味の属性の副用語として、φ型の「実際」は陳述の副用語として使われていて、形態によって修飾機能が異なる。以下に、昭和期データの「実際に」の属性の副用語の例と「実際」の陳述の副用語の例をそれぞれあげる。

[11]彼は文壇づきあいのいい加納の生活を考えた。理事会にも必ず出席し、若い編集者たちと遅くまで飲む加納は磊落な作家だと思われていたが、神経質で人間嫌いな面がその小説にはにじみ出ていた。それを実際に知っているのは昔からの仲間だけだったかもしれぬ。（『スキャンダル』1986）

[12](しかし、このケースを夏子と江分利におきかえたとき、はたして江分利にこのような演技が可能だろうか。江分利は皆に冷たい男だと言わ

る。単行本『刺青』に所収された短編名は論文末尾の【資料】に示されている。

www.kci.go.kr

れる。実際、その日の午後悔みにきた東西電機の赤羽常務に、父は江分利は冷血動物のような男ですから、と言ったという）（『江分利満氏の優雅な生活』1963）

ここで、陳述の副用語「実際」の構文機能について述べておく。上記の例[12]で「実際」は、「悔やみにきた」を修飾する属性の副用語ではなく、「実際」は「実際」以下の「その日の午後悔みにきた東西電機の赤羽常務に、父は江分利は冷血動物のような男ですから、と言ったという」の文全体にかかる。これは「実際」の位置からも確認できる。一般的に属性の副用語は大抵の場合、修飾する用言のすぐ前に位置するが、文全体にかかる副用語は文頭に位置する傾向がある。そして属性の副用語は修飾する用言になんらかの意味を付加し、用言の意味をより詳しくするが、文の外側から文全体にかかる陳述の副用語は文の内容に意味を付加することはない。その点は例文から「実際」を抜きにしてみるとわかりやすい。「実際」を抜いても「その日の午後悔みにきた東西電機の赤羽常務に、父は江分利は冷血動物のような男ですから、と言ったという）」という文の意味は「実際」を抜く前と情報の加減なく成立する。

つまり、例文[12]の「実際」は後に続く用言を修飾する属性の副用語ではなく、「その日の午後悔みにきた東西電機の赤羽常務に、父は江分利は冷血動物のような男ですから、と言ったという）」の外側から機能するものである。それでは、例文[12]の「実際」の構文機能は何か。話者（この場合は作者）は「江分利は皆に冷たい男だと言われる」の文を裏付けるための実際の証拠として「その日の午後悔みにきた東西電機の赤羽常務に、父は江分利は冷血動物のような男ですから、と言ったという）」という文を述べている。つまり、「実際」は、前の文を裏付けるために後の文を取り上げる話者の態度を表す陳述の副用語である。

以下の例文の「実際」もまた後につづく用言にかかるのではなく、「ベテランの昭子に休まれると、この事務所はまったくお手あげになるのだった」全体にかかる陳述の副用語である。話者は先行文の主人公が諒解してもらえた根拠として、「ベテランの昭子に休まれると、この事務所はまったくお手あげになるのだった」という文を取り上げ、先行文を裏付けている。「実際」は後ろに来る文が「実際」の前の文を裏付ける関係にあることを表す陳述の副用語である。

[13]弁当を持って松ノ木敬老会館まで送って行き、それから出勤すると事務所には一時間の遅刻になったが、そこは小人数のところだから事情を話せば諒解してもらえた。実際、ベテランの昭子に休まれると、この事務所はまったくお手あげになるのだった。（『恍惚の人』1972）

もっとも、昭和期データの「実際に」と「実際」の例すべてがニ型は属性の副用

www.kci.go.kr

語、φ型は陳述の副用語として使われているわけではない。以下に例にあげた例外のものもある。しかし、両方とも例外は1例に過ぎないので、この時期において一般的に「実際に」は属性の副用語、「実際」は陳述の副用語として使われているとみていいと考えられる。

[14]神宮の野球場の全盛時代、つまり6大学野球の全盛時代はいつ頃だろうか。江分利が実際見た範囲でいえば、昭和12、13年はひとつのピークではなかったかと思う。（『江分利満氏の優雅な生活』1963）

「実際」と「実際に」の、「φ型／ニ型」のゆれの例を通じて、同じ漢語語基からなる漢語副用語の場合、陳述の副用語はφ型をとりやすく、属性の副詞語のうち様態の副用語はニ型をとりやすい傾向があり、形態と修飾機能との間に関係があることがうかがえる。

・「正直に」と「正直」

明治期データの「正直に」の例は5例があって、全部様態の副用語である。

[15]「何処で何を盗んだか、正直に白状しろ。」（『刺青・少年』1911）

[16]「正直にしていれば誰が乗じたつて怖くわないです」（『坊つちやん』1906）

昭和期データには「正直に」が6例、「正直」が9例があるが、「正直に」の例はすべて様態の副用語の例である。

[17]偶然のことから年下の一人の女と知りあいました。彼女も同じように抑えきれぬ無気味なものを心に持っていました。正直に申しあげます。彼女が先生の肖像画を描いた糸井素子です。（『スキャンダル1986』）

ところが、昭和期に新しく出現する「正直」の次の例は、話し手の発話時の態度を表す陳述の副用語である。例文[18]の「正直」は用言「むらむらした」の様態を修飾するのではなく、話者が「正直にいうとむらむらした」ということで「むらむらした」と述べるときの話者の態度を表し、「正直」は後に続く用言を修飾するのではなく、文の外側から文を述べるときの話者の態度を表す修飾機能を持つ陳述の副用語である。

[18]「潤子はともかく、田毎さんも仲間だと知ったときは、正直、むらむらしました。怒りじゃなくて、嫉妬の方でしたがね」（『折鶴』1987）

[19]「（省略）嫂さんにはすまないすまないって思ってたんだけど、私も主人や主人の親類の手前ねえ、田舎でしょう？お父さんの気に入るようなこと何も出来なくって、兄さんが結婚してから、お父さんが東京へ行くって言い出したときは正直助かったって思ったのよ。（省略）」（『恍惚の人』1972）

www.kci.go.kr

しかし、昭和期データの「正直」の例がすべて陳述の副用語の例であるわけではない。上記の2例以外の残りの4例は「正直いって」の形で使われ、「正直いって」という句が「正直」同様、話者の態度を表す機能をしている。

[20]「へえ、この『陸上ニュース』、これ」岡谷さんの感にたえたような声が聞えた。「これ、お宅の社で出してるんだよ」正二郎は言った。「それは知ってますが……正直言ってこんな雑誌誰が買うのかと思ってました」「うちの息子のような奴が買うんだ」（『太郎物語1973』）

「正直いって」という句のなかだけを考えると「正直」は「いう」という動詞を修飾する様態の副用語であるが、「正直いって」の句全体は文を述べる際の話者の態度を表している。「正直いって」以外に、明治期データと昭和期データともに「正直にいって」の例もそれぞれ1例ずつあるが、φ型の「正直いって」の方が「正直にいって」より優勢であるようである。

参考として少ない例を補うため、『日本国語大辞典』から「正直」を引くと、形容動詞と分類されている様態の副用語「正直に」の例は、『今昔物語』からある。

[21]本より心に邪見を離れて、正直にして、物を惜み貪ぼる无し（『今昔物語十五・八』1120頃か）（『日本国語大辞典5巻』）

副詞として分類されている「本当のところ」の意味を表す陳述の副用語「正直」の例は、一番早いのは以下の江戸時代の例である。

[22]しかし正直未練が残るぜ。此美しい顔が見おさめだと思やア（『人情本・春色英対暖語四・二三章』1838）（『日本国語大辞典5巻』）

ほかに、明治期の例として以下の2例が示されている。

[23]私は最後の半歳ほどは正直お前を恨んでゐる（『別れた妻に送る手紙1910』）（『日本国語大辞典5巻』）

[24]足立さんに招ばれてるだけに、正直、行きたくないんだけど（『今年竹1919－27』））（『日本国語大辞典5巻』）

明治期と昭和期両データと『日本国語大辞典』の例から判断すると、「正直に」と「正直」は陳述の副用語として機能するときはφ型の「正直」の形態をとり、様態の副用語の機能を持つときはニ型の「正直に」の形態をとる傾向がみられる。

・「一体に」と「一体」

明治期データには「一体に」が5例、「一体」が47例あって、「一体に」の5例はすべて「概して」または「全般的に」の意味を表す様態の副用語である。

[25]此坐敷の天井は殊さらに少し低く、周囲の道具などは一体にドツシリして美くし

www.kci.go.kr

く彫刻して有りまして、椅子などは坐はり込みのふかい、寄り掛りの高くつて、ガツシリしたのでした。（『小公子』1890-91）

[26]民子はいつしか笊を下へ置き、両手を鼻の先に合せて太陽を拝んでる。西の方の空は一体に薄紫にぼかした様な色になつた。（『野菊の墓』1906）

一方の「一体」は「総じて、もともと」の意味である事柄を全般的に、概括的に考えていったり、または発話時の話者の疑問の気持ちを強く表し、疑問の形式と呼応する陳述の副用語である。

[27]「（省略）女と云ふ者は一体男よりは情が濃であるべきなのだ。それが濃でないと為れば、愛してをらんと考へるより外は無い。（省略）」（『金色夜叉』1897-1902）

[28]「おまへのおぢいさんとハ、それハ一体、誰なんだ？」（『小公子』1890-91）

また、昭和期データには「一体に」は出現せず、「一体」が108例あるが、全部疑問の形式と呼応する陳述の副用語である。

[29]「いったい、どんな画家たちの集まりですか、あの展覧会」「若い女性のグループです。何でも、醜いものに美を見つけると言っていましたわ。醜の美学だなんて」（『スキャンダル』1986）

[30]つい一と月ほどまえの美術雑誌のコラムに、このごろはテレビやラジオで美術家だの評論家だのと、もっともらしい職業を名乗る人物が、しきりに出てきて何やら聞いたふうなことをしやべっているのを見掛けるが、彼等はいったい何モノなのか、といった記事があり、謙介の名前もヤリ玉に上げられていた……。（『幕が下りてから』1967）

「一体に」と「一体」の例からも、同じ漢語語基からなるものでも陳述の副用語はφ型をとりやすく、様態の副用語はニ型をとりやすい傾向が確認される。

4.2　程度の漢語副用語はφ型を、様態の漢語副用語はニ型をとりやすい

・「特別に」と「特別」

明治期データの「特別に」1例は用言の様態を修飾する様態の副用語である。φ型の「特別」は明治期データには出現しない。

[31]湯の中で泳ぐものは、あまり有るまいから、此貼札はおれの為に特別に新調したのかも知れない。（『坊つちやん』1906）

昭和期データには「特別に」が2例、「特別」が3例出現する。「特別に」の2例は明治期データの「特別に」と同様、普段と異なるという意味を表し、属性の副用

www.kci.go.kr

語のなかでも用言の様態を表す様態の副用語である。

[32]夜、発って、翌朝から京都見物で大阪泊り、次の日は六甲で遊んで有馬温泉泊り、3日目の朝、現地で解散という日程であるが、日曜を1日はさんでいるから、実際には休暇は2日間で例年通り、特別に社員負担2千円払わされたから、会社側の損害は軽微である。このへんの常務の計算は実に確かなものだ。（『江分利満氏の優雅な生活』1963）

ところが、φ型の「特別」の例はすべて述語の属性・性質の程度が普通よりはなはだしいことを表す、程度の副用語の例である。

[33]「髪を洗うときは特別熱いお湯でって、いつもそう言うんだけど、今日はああいい気持だ、極楽へ行くみたいだって、何度も何度も言ってました」（『恍惚の人』1972）

[34]「でも先生、お爺ちゃんは歩けるし、お便所も自分で行けるんです。お湯の中だって立てた筈なんですけど、湯舟も特別深いわけじゃないのに、どうして溺れたんでしょう。老人性痴呆でしょうか、これ」（『恍惚の人』1972）

「特別」と「特別に」の例から、同じ漢語副用語で程度の副用語として機能するときはφ型をとりやすく、用言の様態を修飾する様態の副用語として機能するときはニ型をとりやすい傾向がうかがえる。ただし、昭和期データの「特別」の例は、すべて『恍惚の人1972』の例で、一遍の作品にだけ使われている。したがって、程度の副用語としての「特別」の用法は1960－80年代当時としてはそれほど一般的でなかった可能性もある。

・「猛烈に」と「猛烈」

明治期データには「猛烈に」が1例出現し、昭和期データには「猛烈に」と「猛烈」がそれぞれ2例ずつ出現する。次の明治期データで「猛烈に」は「捻る」動作の様子を修飾する様態の副用語であるが、「捻る」ときの力の強さ加減がはげしいことを表しているので、程度の副用語的な要素を多分に持っている。

[35]文章を髭から捻り出して御覧に入れますと云ふ見幕で猛烈に捻つてはねぢ上げ、ねぢ下ろして居るところへ、茶の間から妻君が出て来てぴたりと主人の鼻の先へ坐はる。（『吾輩は猫である前編』1905-06）

ところが、昭和期データの以下の「猛烈に」の例と「猛烈」の2例はすべて完全に属性・性質の程度を表す程度の副用語の例である。

[36]もっとも一度、或る出版社へ前借を申し込みに行って、編集室の扉を押して入ろうとする拍子に、その時まで何ともなかった右の奥歯が突如、猛烈に痛み

www.kci.go.kr

出し、片手を頬に当てたまま棒立ちになって、その場を一歩も動けなくなったことがある。（『幕が下りてから』1967）

[37]「やられた」と青山さんは言った。「どこをやられたの」久男が尋ねた。「お昼に天丼を食べて……それから吐いてしばらく彼女の家でやすんできたんだけれど、猛烈胸が悪い」（『太郎物語』1973）

明治期と昭和期データから「猛烈に」は本来述語の様態を表す様態の副用語であるが、程度の副用語の要素も持っていて、属性・性質の程度を表す程度の副用語としての用法が優勢になったと考えられる。そして、「猛烈に」と「猛烈」も「特別に」と「特別」と同様、様態の副用語として機能するときはニ型をとりやすく、程度の副用語として機能するときはその形態がφ型をとる傾向がみられる。ほかに「猛烈に」と「猛烈」と同様、様態の副用語と程度の副用語、両方の用法があるが、程度の副用語として働く場合、φ型になりやすい例として「大層に」と「大層」、「大変に」と「大変」がある。

4.3 属性の副用語と状況の副用語の境界線上にあるものはφ型をとりやすい

「早速に」と「早速」、「突然に」と「突然」は、仁田義雄（1983）の副詞の分類では様態の副詞の下位分類の〈取り掛かりの早さ〉を表すものに該当する副用語である。

これらの傍線部は、動きの起こしに至るまでの所要時間のあり方、つまり〈取り掛かりの早さ〉を述べた副詞である。

（中略）

したがって、〈取り掛かりの早さ〉を表す副詞は、動きへの準備段階をも含め一つの動きとして見做すことによって、動きそのものに内属する側面から動きの実現のされ方を特徴づけた様態の副用語として捉えられるものの、一方では、動きそのものの外側にある動きの成立する時間的状況のあり方を表したものといった性格を持っている。〈取り掛かりの早さ〉を表す副詞は、あり方の副詞と時間関係の副詞の間にある、或いはその双方の性格を有している、と言えよう。（仁田義男(1983)，p.22）

「早速に」と「早速」、「突然に」と「突然」は時間的な側面からみた動きの実現のされ方を表す。そのため、用言の動きを修飾する属性の副用語であるが、様態ではなくその動きが実現するときの時間的な要素を限定する点で、典型的な属性の副用語とは異なる。いわば時間を表す状況の副用語の性格も一緒に持っているといえる。属性の副用語ではあるが時間を表す状況の副用語の性格も合わせ持っているものにニ型とφ型の形態のゆれまたは変化がみられる。仁田義雄（1983）にあげられている例のほかに、「偶然に」と「偶然」も、「早速に」と「早速」、「突然に」と

www.kci.go.kr

「突然」と同じ性格のものである。以下に「早速に」と「早速」、「突然に」と「突然」、「偶然に」と「偶然」の例を示す。

・「早速に」と「早速」

[38]フォントルロイ殿は早速に、それは沢山有升ワ、デスガそれよりメレの妹にお金を遣り升ワ。（『小公子』1890-91）

[39]早速仙吉は四つ這ひになつて、座敷中を威勢よく駆け回る。（『刺青・少年』1911）

[40]夫の見ている前だと、茂造の面倒を見るのも甲斐があるような気がするので、早速爪切りを持って舅の傍に寄った。「お爺ちゃん、爪を切ってあげましょうね」（『恍惚の人』1972）

・「突然に」と「突然」

[41]一度は間近くから突然に雉子の一群が、羽敲して飛び出し、又飛び去りました。（『小公子』1890-91）

[42]誰もいない廊下に出て、二人が軋んだ音をたてるエレベーターに乗ると、「やっぱり夢みていたみたい」少女は突然、思いだしたようにひとりごとを言った。（『スキャンダル』1986）

・「偶然に」と「偶然」

[43]今の偶然に起つた簡単な問答は、お互の胸に強く有意味に感じた。（『野菊の墓』1906）

[44]おれが蜜柑の事を考へているところへ、偶然山嵐が話しにやつて来た。（『坊つちやん』1906）

[45]「思い出すよ」青山さんが言った。「偶然、この道を来たんだよ。彼女と一緒に」（『太郎物語』1973）

5．まとめ

本稿では、明治の言文一致期以降明治末期までと1960－80年代までの両時期の漢語副用語の「φ型／ニ型」を中心に形態のゆれ及び変化について考察を行った。その結果、次の三点が確認された。第一、同じ漢語語基からなる漢語副用語が様

www.kci.go.kr

態と陳述の副用語の二つの修飾機能を持つ際、様態の副用語はニ型をとりやすく、陳述の副用語はφ型をとりやすい傾向がみられた。第二、属性の副用語のうち様態の副用語と程度の副用語の両方の修飾機能がある場合は、様態の副用語はニ型を、程度の副用語はニ型の形態をとりやすい傾向があった。第三、属性の副用語と時間を表す状況の副用語の境界線上にある副用語にニ型とφ型の形態のゆれ及び変化が多くみられ、φ型の形態をとる傾向が確認された。

趙英姫（2003）では属性の副用語のうち程度の副用語、状況の副用語、陳述の副用語にφ型が集中していると指摘したが、本稿の考察からも同様の傾向がみられた。

【資料】

《明治期小説》

伊藤左千夫『野菊の墓』（1906）尾崎紅葉『金色夜叉』（1897-1902、会話文だけを対象とした）。国木田独歩『武蔵野』のうち『河霧』『鹿狩』『まぼろし』『武蔵野』『忘れえぬ人々』の5作品（1901）谷崎潤一郎『刺青』のうち『麒麟』『刺青』『少年』『秘密』『幇間』の5作品（1911）夏目漱石『坊つちやん』（1906）夏目漱石『吾輩は猫である上編』（1905-06）二葉亭四迷『浮雲』（1887-89）山田美妙『夏木立』のうち『籠の俘囚』『玉屋の廛』『花の茨、茨の花』『柿山伏』『仇を恩』『武蔵野』の全作品（1888）若松賤子訳『小公子』（1890-91）＊『浮雲第三篇』は早稲田大学図書館所蔵のマイクロフィッシュ、『小公子』は複製版『女学雑誌』227-278号を使用し、ほかは近代文学館の復刻版を使用した。

《昭和期小説》（作家名、作品名、（初刊年）（テキスト）の順で示す。初刊年がないのは括弧内の初刊テキストを使ったことを意味する）

●60年代：安岡章太郎『幕が下りてから』（1967）（『安岡章太郎集7』、1988、岩波書店）、山口瞳『江分利満氏の優雅な生活』（『江分利満氏の優雅な生活』、1963、文芸春秋新社）

●70年代：有吉佐和子『恍惚の人』（1972）（『有吉佐和子選集第2期第8巻』、1977、新潮社）、曾野綾子『太郎物語』（1973）（『太郎物語高校編』、1978、新潮文庫）

●80年代：泡坂妻夫『折鶴』（『折鶴』、1987、文芸春秋社）、遠藤周作『スキャンダル』（1986）（『遠藤周作全集4長編小説Ⅳ』、1999、新潮社）

www.kci.go.kr

【参考文献】

·北原保雄（1975）「修飾成分の種類」『国語学』103，18-34頁

·工藤　浩（1977）「限定副詞の機能」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』，969－986頁，明治書院

（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3モダリティ』，163-243頁，工藤　浩・仁田義雄・森山卓郎，岩波書店

·国立国語研究所（1963）『話しことばの文型(2) 独話資料による研究』，75-80頁

·鈴木　泰（1980）「情態副詞の性質についての小見」『山形大学紀要（人文科学）』9-3，45-79頁

·趙英姫（2001）「近代語形成期における漢語副詞の出現形態と使用場面との関連性」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第46輯第3分冊，53-62頁

（2002）「近代漢語副用語の出現形態と使用場面との関連性」『早稲田日本語研究』10，87-98頁

（2003）「近代語形成期における漢語副用語の修飾機能―漢語形容語を視野に入れて―」『国文学研究』104，57－67頁

·中右　実（1980）「文副詞の比較」『日英比較講座第2巻　文法』，159-219頁，国広哲弥編，大修館書店

·仁田義雄（1983）「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』2-10,22頁

（2002）『副詞的表現の諸相』，33－41頁，くろしお出版

·野村雅昭（1998）「現代漢語の品詞性」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』，1197-1213頁，汲古書院

·原田登美（1982）「否定との関係による副詞の四分類」『国語学』128，122-138頁

·前田富祺（1983）「漢語副詞の種々相」『副用語の研究』，360-378頁，渡辺実編，明治書院

（1983）「漢語副詞の変遷」『国語語彙史の研究』4，189-231頁，国語語彙史研究会編，和泉書院

·山田孝雄（1909）『日本文法論』，860-882頁，宝文館出版，

（1941）『国語の中に於ける漢語の研究』，205-276頁，宝文館

·渡辺 実編（1983）『副用語の研究』，1-67頁，明治書院

www.kci.go.kr

要 旨

本稿では、明治の言文一致期以降明治末期までと1960－80年代までの両時期の漢語副用語の「φ型／ニ型」を中心に形態のゆれ及び変化について考察を行った。その結果、次の三点が確認された。第一、同じ漢語語基からなる漢語副用語が属性と陳述の副用語の二つの修飾機能を持つ際、属性の副用語はニ型をとりやすく、陳述の副用語はφ型をとりやすい傾向がみられた。第二、属性の副用語のうち様態の副用語と程度の副用語の両方の修飾機能がある場合は、様態の副用語はニ型を、程度の副用語はφ型の形態をとりやすい傾向があった。第三、属性の副用語と時間を表す状況の副用語の境界線上にある副用語にニ型とφ型の形態のゆれ及び変化が多くみられ、φ型の形態をとる傾向が確認された。

筆者はほかの論文で、漢語副用語の修飾機能について考察し、漢語副用語の形態と修飾機能との間に関係があることを指摘した。それによると、まず漢語副用語は修飾機能によって、属性の副用語と状況の副用語、陳述の副用語に分類される。そして、属性の副用語の形態はダ・ナ類（いわゆる形容動詞）の連用用法とト・トシテ型、ニ型の一部、φ型の一部であった。状況の副用語の大半はφ型のもの、陳述の副用語は多くはφ型のもので、ニ型の一部のものが含まれる。本稿の考察結果は、以上で述べた漢語副用語の形態と修飾機能との関係を裏付けるものと考えられる。

キーワード：近代語、漢語副用語、形態、修飾機能、語基

투　　고	2007. 2. 28
1차 심사	2007. 3. 10
2차 심사	2007. 3. 31

住　所：(139-915) 서울특별시 노원구 월계3동 미성 아파트 15동 406호
電　話：010-9478-4936
e-mail：hemin0410@yahoo.co.kr

www.kci.go.kr